

横山源之助著

# 一〇〇年前のルポルタージュが 描出した「貧困」問題の解決策

評者 北村行伸 一橋大学経済研究所教授

三浦展氏の『下流社会』（光文社新書）がよく読まれているという。

そこで描かれている下流層とは若年層で生活水準と意欲が低い人びとを指し、社会の下層ではなく中の下あたりにいる人びとのことだそうである。

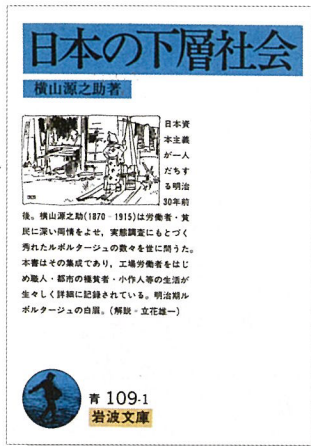
しかし、社会政策として社会の二

極化を考えるとすれば、最貧層の実態を知る必要がある。わずかな消費者ローンの返済取り立てに絶望して命を落とす人たち

やみとる人もなく孤独死する人びと、職を失った路上生活者が増えている社会をわれわれが結果として生み出していることをどう考えればいいのか。

**現** 在の格差社会や貧困層の拡大問題を考えるうえで、今

から一〇〇年以上前の一八九八（明治三二）年に横山源之助によって丹念に調べられたわが国初の貧困層に対する社会調査、ルポルタ



1985 年刊  
岩波文庫  
(初版は49年)

## 実態をつかんでこそ 解決の道が見える

一〇〇年である本書を再読することをお勧めしたい。

横山は東京の貧民の生活状態、

職人、手工業労働者、工場労働者、小作人事情について調査を行ない、さらには、失業者、未就業者らの実態にも言及している。そこで調べられているのは賃金や生活統計のみならず、職位別の労働実態、労働契約や自由時間の有無、労働者の教育水準などじつに細かい点にまで及んでいる。

彼の調査方法は、自ら現場に行き、聞き取り調査を行なうという

ものだ。随所に出てくる貧困層の生の声や本書の価値を高めている。貧民の実態に肉迫したからこそ貧困解決策として挙げられた、(1)貧困者向け融資金融機関の設置、(2)貧民への教育の拡大、の二点はきわめて具体的であり現実的要請も高いものとなっている。

さらに、横山は、日本の貧民の実態は、資本家に搾取されて生じた経済貧民というより、教育不足や自立心の欠如による人生の不幸者であり、その問題を改革すれば、貧困問題は解決できるという立場を取っていた。当時の風潮としては社会主義に傾倒しても不思議ではないなか、社会主義的立場を取らなかったことは特筆に値する。

これは、横山が貧民の実態を観察することによって、日本における貧困の本質を理解したうえでたどり着いた冷静な判断であった。

現在の貧困層の拡大、不平等の拡大という事象を政府統計やマーケティングの意識調査の結果、だけから主張したり、逆にそれを他の統計で批判するだけでは不十分である。横山が行なったように現場に行つてその実態を正確に記録することが必要であり、実態を把握して初めてその具体的解決方法が出てくることを本書は教えてくれている。